

# 戦乙女 ヴァルキリー2

ヒルデガード～墮つる大地～

原作 ルネ  
小説 空蟬  
表紙 田丸まこと  
挿絵 三巻文

立ち読み版



第五夜 新たなる生け贄

第六夜 姦計に墮つ

第七夜 墮落女神たちの淫夜

第八夜 誓い、墮つ

第九夜 墮つる大地

## 登場人物紹介

Characters



### ヒルデガード

大神オーディンの娘。誰にでも優しく接する、清純な戦乙女。囚われたアリーヤとレイアを救うためデュークのもとへ乗り込む。

### ロキ

神と魔族のハーフで、デュークと行動をともしるミステリアスな美女。かつてはオーディンの側近として仕えていた。

### アリーヤ

天界最強といわれる戦乙女だったが、デュークによって囚われ、過酷な陵辱を受け続けている。

### レイア

度重なる陵辱により暗黒面へと堕ちてしまった戦乙女。慈愛に満ちた優しい性格だったが、今では快楽を貪ることしか考えられなくなっている。

### デューク

人間と魔族のハーフである魔王軍暗黒騎士団の長。これまでに数々の戦乙女を調教してきた。

# SYNOPSIS

これまでのあらすじ

神軍と魔王軍が地上の覇権を巡って争い続ける世界——魔王軍の手に落ちた戦乙女レイアを救うべく、最強の戦乙女アリーヤは単身敵の本拠地に乗り込む。しかし、魔王軍暗黒騎士団長・デュークに籠絡されたレイアの手により、彼女も囚われの身となってしまう。

乙女の証である秘裂に強固な貞操帯を穿かせられたまま卑しく醜悪な民衆に排泄穴を犯されるアリーヤ。嫌悪感を抱きつつも激しく感じてしまう自らの肉体に驚愕することしかできず、さらには快楽に溺れ淫欲の虜に落ちてしまったレイア達にまでも激しい責めを受けることに。

誇りにかけて必死に堪えるが、女神の力を失う蝕の日を迎え、デュークに膣内射精されたアリーヤは魔族との子をその胎内に宿してしまうのだった。

その頃、アリーヤとレイアを奪還すべく新たな戦乙女がデュークのもとへと向かっていた――。



黒き鎧を纏いし墮落乙女。伝承に語られし墮ちた戦士、ブラックヴァルキリー。彼女の心が墮ちた最たる証拠を目にしてもなお、少女は敬愛するレイアを信じていたかった。

「だから、愛し合う二人が睦むのを止めるのかい？ それとも魔族と神の混血が許されないことなのかな。……この、ボクみたいになさ」

最初は、彼女を傷つけてしまったのだと良心が痛んだ。

けれど不意に届いた声はひどく平坦で、そのくせ怜悧な響きを伴っていて。銀髪の乙女の三つ編みをくすぐった声音は、鋭く胸の奥にまで突き刺さり衝撃を伝える。振り向き見たロキの表情に、心の臓をわしづかみにされたかと思うほど、身が強張った。

うつすらと唇を歪めて——彼女は笑っていたのだ。微笑むロキの唇に意識を惹かれ、無意識のうちに吸い寄せられた鼻先で、少女は女悪魔の吐息を浴びてしまう。

「……ツツ!? ま、また、か、身体が……っ、んあッひいあああ……っ!」

怒りでもなく、哀しみでもない。ただ嘲笑を浮かべるロキにからめとられ、甘く香る吐息を肺一杯に吸いこまれた。同時に、初めてキスを捧げた時と同じ身の昂揚が襲いかかり、乙女の身体はふわふわと不確かな夢見心地に陥って、抵抗を削がれてしまう。

ロキに触れているとどこまでも惹きこまれてしまいそうで、底知れぬ恐怖を心の底に植えつけられる。与えられる快楽がまるで際限のない麻薬のようにすら思えてきて、けれど抗うことを拒むように肉体はロキの柔い乳肌へと肩を預けすり寄っていく。

(どお、してええっ……。ロキさんが、ロキっ、さあんっ……。!)

本来の目的、レイアを説得することを考えるなら、ロキを振りほどき、快樂を振り払うべきだ。なのに例えようもない安心感を与えてくれる彼女の乳肌の柔らかさが、意識下にこびりつき離れてくれない。彼女の吐息を吸いこむほど、朦朧と霞む脳裏に愛しさと昂奮が強制的に詰めこまれていった。

「ほんと、ヒルダはぎゅってされるのに弱いよねえ。毎晩添い寝して抱いてあげたボクの胸……気に入ってくれたみたいで嬉しいよ、ふふ……ほお、らッ」

頭半分ほど上背のあるロキの胸に、すっぽりと乙女の身体は収まってしまふ。コリコリと、腋やうなじのあたりに押し当てられるロキの胸肉。半分こぼれ、半分だけがしまわれた彼女の衣装越しに、ひたすら柔らかく温かみを感じるその先端は硬く尖っていて、彼女の昂奮を、悦びを、頼みもしないのに克明に伝えてくれた。まるで弾む心拍音まで聞こえそうで——好かれているという実感が、ヒルデガードの鼓動をも速めさせる。

「ご主人様ああん！ 欲しいですう、あなたの赤ちゃんっ……産みたいのおおおっ！」

まるでよく知る女神の姿を借りた、悪魔の類が浅ましく啼いているようだ。

信じたくない。信じられない。彼女がかつての戦乙女、敬愛する『天の至宝』なのだと思つた瞬間、自分の信じてきたすべてが打ち砕かれてしまふ——。

（は、ああ……つく。きつと立ち直つてくれる……レイアお姉様だもの！ 私が信じた、強くて優しい人……だもの……！）

ヒルデガードは自らのロキに対する思慕をごまかすように、心に浮かぶ在りし日の金髪

の女神に、すがり続けた。

「ふっ……どうせ今度も外れだろう……」

「ち、違います。今日はだいじょうぶっ、なのお！ 危険日だからあ、今度こそデュークの、ご主人様の赤ちゃんっ……ほら、ほらあ。オマンコも精子欲しいって、こんなにつ、キユウキユウ……っ！ ねっ？ ねええっ！」

たつぷりの蜜で濡れた白い尻をふりふりと揺すって魔将の肉棒を刺激し、潤む瞳で背後の彼を見つめながら、現実のレイアは甘く、獣のようにいななき、悶え続ける。

「あ、ああ……っ。も、もうやめて、えっ……」

墮ちた女神の、禁忌なる願い。届かぬ、己の想い。再度突きつけられた現実を直視せざるを得なくなつた銀髪の乙女の心は、幾度目かの深い失望に染まつてゆく。

「あつちの二人も愉しんでるんだから、ボクらも……今は全部忘れて愉しんじやいなよ」  
きゅっ！

「ふあ……っ！ ダ、ダメえっ！ ……お願い、ですっ」

乳首をつままれてようやく、自分のソコもロキのもの同様ツンツンと健気に尖つてしまつていることに気づかされる。これ以上、切なさを与えられれば、どうなるのか。未知の領域に引きずりこまれることが、怖かつた。

「だいじょうぶ。ほら、ギユツと抱いてあげるからさ……」

いくら乞おうと、乳首をつねる半神半魔の指先は止まってはくれない。逆に強く、腰を



押さえた右腕で抱き寄せられ、密着の強まったふたつの身体の接点がじつとりとした熱を孕んだ。白い指先が嬉しげに乳肉をもみ潰し、つねられて赤くなった過敏な先端を押し潰されて、息を呑む。電撃のように背筋を駆けた衝動は、癩づくほどに甘く、もじつく股下へと痛切に響く。

(くちゅ、くちゅ、してる……うう)

なぜ、こうも彼女の指で弄られると快感を覚えてしまうのか。

「同じ女だからさ。一緒に暮らした五日間で、ヒルダの弱い部分も全部わかっちゃってるしね。だから……ほら」

心を読んだかのようにタイミングよく響くささやきに、身体の芯まで震わされる。

「くあんっ！ ……ぜん、ぶ、だなんて、ええっ。そん、な、あああっ」

弄られた乳首が切なく震えていた。強く握られて痛いはずなのに、その痛みの中に混じるわずかな快楽が、まるでスポンジが水を吸うように乳肉にじわじわ染み入ってくる。

張りを増した乳肌を滑らかな手つきでなぞられ、痛みで敏感になった乳首を優しく転がされて、堪えきれない甘い声が、舌先からこぼれてゆく。

(くっくっ……！ ……へ、んに、なるうう……っ！)

もじもじとせわしなく揺れる股下で何か粘り気のある汁が漏れ始めたのを、濡れて張りつく下着の感触で否応なく実感させられた。

囚われたあの日、ロキに愛撫されて感じたのと同様の感覚。あの日は唐突にやめられて、

最後まで味わえなかった、名残惜しさを感じてしまった、あの感覚。どこまでももどかしい刺激が、今は止め処もなく与えられ、ウブな心根を塗り替えていく。

湿って肉の割れ目に張りついた下着の感触が心地悪くて、でも背筋をゾクゾクと切なさ  
が駆け続けている。決して不快なだけではない、浮足立つような浮揚感に溺れてゆく。

「それが、正常なオナナの反応さ。隠すことも、恥ずかしがる必要もない。ボクのシ  
ョーッだつて……ほら。く、ふううっ」

くちゆりと濡れた粘着音。尻の谷間で、スカート越しにもこもった熱気を感じた。露わ  
なロキの紫のシヨーッがドロドロに濡れて、前布が不自然に盛り上がっている。

「ロッ……ひ……っ、あ！ あああくうう……っ!!」

本能的な不安を抱いて彼女の名を呼びかけた、直後。膨らんだ前布でゴシゴシと扱かれ  
て、乙女の尻肉が震え上がった。

「擦ら、ないでっ……放して、放してくだつ、くっふ、うあッッ」

グチグチと鳴る音のイヤらしさと、火傷しそうなほどの熱を孕まされて、頭の芯が痺れ  
ゆく。ぼやけ始めた脳裏に、ロキの声は驚くほど鮮明に響き、浸透する。

「ふふ。見なよ……レイアのクリトリス……ほら、オマンコの上にはぼちりと咲いてる、  
肉の豆みたいなところ。あんなに充血して、デュークのちんぽで奥を叩かれるたびにピク  
ピクって悦んでる」

ズリズリと硬い肉の幹で尻の谷間を擦り上げながら、ロキがささやいた。耳朵を食まれ

よけいに感度を増した股肉で、脈打ち猛る肉棒の熱を必要以上に受け取って、火照りが切なさを引き寄せる。

（悦んで、る……？ レイアお姉様のおそこが裂けそうなくらい拡がって……なのに、悦ぶだなんて、ふ、うああッ……！ 気持ち……いいなん、て、う、嘘オオッ……！）

ガチャ、ガチャと、纏う鎧があるじの震えに同調し哀しげに啼く。照明を浴びた翡翠の輝きはますます光きらめいて、ヒルデガードの心に濃い不安の影を敷き詰める。

「目をつぶつちや、ダメだよ。しつかりと見てあげなきや。レイアが、キミの敬愛した女神が子を孕むかもしれない。大事な瞬間なんだからね」

どこまでも苦く、甘い。濃厚なチョコレートを思わせるロキの声音が、敷かれたばかりの不安に肉欲を添えて、瞬く間に切ない疼きへと変容させてしまう。

「あぐ……っ、い、やあつ。見たく、ああつ……見たく、ありません、っ……」  
偽らざる本心、のはずだった。

「ふ……穢れてしまったお前など、もう見たくないそうぞつ！」  
ずばんっ！

「んぐううう！ はひっ、い、いんっ！ すご、いいいっ！ ご主人様のおちんぽお！ やっぱり素敵っ、奥までパンパンになつてえええ！ あ、愛してますうう！」

魔将の蔑みにすら悦楽を煽り立てられ、相変わらず美しい金色の髪をなびかせて。墮落乙女は淫堕な笑みを浮かべながら、尻を振る。高く持ち上がったては深々と腰を下ろす。卑

しく開脚した足首が延々と痙攣していた。

見え隠れする牡の幹が、レイアの漏らしたたつぷりの蜜汁でテラテラ濡れ光っている。

「……っ！ あ、あんなっ」

醜く、無数に浮き上がった血管が奔る節くれ立った肉凶器。少女の手首ほどもある剛直がレイアの中へと埋没し、好き放題に暴れている。遠慮のないピストンでヂュボヂュボ掻き回され拡がった肉穴から、卑しい蜜汁が噴きこぼれてゆく。

エラの張った先端がぎりぎりまで抜けて顔を出す。直後にはレイアの肉壁を巻きこんで激しく鼓動しながらまた奥の奥まで突き入っていった。

「そう。あんなに奥まで入るんだ。ふふ、いくら処女でも、ううん。まだ乙女だからこそ、見惚れちゃうよね。成熟した、大人のオンナの身体と、たくましいちんぽに……あむっ」

「ひあっ！ み、耳、っ！ 息、かけちゃ、やあああ……ッツ！」

耳朶を噛んだロキの火照りが、吐息と一緒に身体の奥まで浸透していく。刺激を受けて銀髪の乙女の腰が引ける、すぐさま尻肉を押し潰しながら密着したロキの腰が押し返してくる。

（あ、つい……硬くて、ドクドク、して……てえっ）

不意に、ドクリとロキの股間で何か、硬い棒状のものが跳ねたような気がする。目の前で繰り広げられる淫態に呼応したかのように繰り返し脈動し、それはあたかもレイアの股間を割り裂く、醜い肉棒そのものようである。

「ひい……っ、や、ああ、あああつ」

処女の少女は戦慄した。

「デュークのものほど太くはないけれど、ヒルダの子宮をこね回すだけの長さはあるよ！」  
魔將の股間に生えた黒光りする肉凶器。今しがた網膜に焼きついたばかりのそれと、己の股間にあるものが同様の存在であると、遠まわしに半神半魔は告げていた。

「ツツ……!! あ、あなたは……っ」

あわてて縛めをほどき振り向いた先で、待ち構えていた彼女の悪戯めいた薄笑みに、また吸い寄せられるみたいに翡翠の瞳が惹かれて——ごく自然に、ふたつの唇は重なった。

「ふう、んぷふうっ……ひやめ……えっ、んちゆるっ、はぶふうう……っ」

「ちゅ、ちゅううっ、んちゅっ。……っぶあ、ふふ……ごちそうさま。……ちゅっ！」

ヌラヌラと蠢き回るロキの舌で口の中すべてにマーキングが施される。舌先同士突つき合ってはくすぐったさに悶え、粘つく唾液が流しこまれるのをなすすべなく受け入れていく。飲み下した喉が甘みに溺れ、ついばむように幾度も触れてくる悪魔の唇に心の芯まで蕩かされていった。

(どう、してっ?! ロキ、さんは……女……なのに……っ！)

本当に、今尻の谷間でせわしく跳ねている塊は、男性器なのか。もしも、ロキの言葉が真実なのだとしたら——。

「ボクは半端者だからね。男でもあり、女でもある。まあ、基本的に女の子なんだけどね。

……両方の機能を備えている、つてわけさ」

処女の疑問を先読みして、青髪を掻き上げ、甘い香りを振りまいてロキが微笑んだ。

「んっんぷううう……」

繰り返されるキスのせいで息苦しく、鎧で押さえつけられた双乳があわただしく弾んだ。鼻で荒く呼吸をすれば、部屋にこもる生臭い臭気までがツンと鼻孔を突き抜けてしまう。

ロキの身体から染み出る甘いにおいとはまるで違う。生魚のような青臭さと形容しがたい、けれど鼻の奥にじつくりと残る、濃厚な臭み。初めて嗅いだ牡のにおいは、少女の胸に嫌悪と不快を、女として目覚めたばかりの肉体に不本意な疼きを残してゆく。

（ロキさんに、男の人の……デュークさんの、みたいな硬い、モノが……っ、あ、あああはっ、うくうう……！）

ばんっばちゅっぢゅぽおおっ！　ぐぼぶぶぶぶぶうっ！

「アひいっ！　んっ、んう、ふうあああああ！　も、もうイクう！　愛しいデュークの、ご主人様のちんぽでえ……！　種付けされながらいつちやううう！」

大地の乙女の動揺と、惑い、密かなる昂奮。すべての感情をない交ぜに攪拌かくはんするように、視線の先の男女の結合部でリズムミカルな、蜜液の咀嚼そしゃく音が響き渡る。

「……どこに欲しい。はつきりと、お前自身の口から言え」

激しい抽送のために飛び散った蜜液が、舞い踊る金髪に、たわむ白い尻肉に淫らな装飾を施していく。

漂う生臭さに汗のおいと、プンと漏れ出たレイアの体臭とが混じり合い、甘い蜜に引き寄せられた昆虫のごとく。顔面を覆うようにつかんだロキの手を引き剥がすこともできずに、彼女の指の間から、ヒルデガードは淫宴の一部始終を見届けてしまう。

「レイ、アお姉さつ……だ、めつ、んツぐぷううう!!」

制止の言葉を募りかけた唇に、ロキの右手小指がねじこまれた。そのまま、まるで目の前の交尾を真似たみたいにズポズポと、口を脛に見立て出入りする。

(や、あああ! まるで、レイアお姉様がされてるみたいにつ、ロキさんの指が、私のお口につ……ぢゅ、ぢゅぽぢゅぽおお!)

舌を擦られ、歯茎を扱かれ、息苦しさに胸がつかえた。ロキの目論見通りに口内をピストンする指の動きから肉棒を連想し、まるで自身が犯されているかのごとき妄想まで脳裏に浮かべて、乙女は被虐に身を震わせる。漂うロキの体臭と、無理にしゃぶらされた指先の汗の甘みとで、よけいに意識は朦朧と、肉欲色の海に溺れていく。

快感を仕込まれた肉体は追いこまれるほどに感度を増し、尻の谷間で蠢く肉棒の鼓動を実感する。目前の男根同様にせわしく脈打ち始めたことを、否応なく悟ってしまう。

知らぬ間に、五日間常に共に過ごしたことでロキの香りの虜にされていることなど気づけぬまま。ヒルデガードは己が肉体の変化に戸惑い、欲情する心に自己嫌悪し、被虐のサイクルに吞まれゆく。

「ひゃぶ……ッ、あ、んぐう……うううっ!」







「この玉に触れていただけですか？　そうすれば、きっと私の心がヒルダお嬢様にも見えるはずです」

それはオーデインの瞳よりも一回りほど小さく、一見してただの水晶玉のようにも思えた。だが黄金色に輝きあふれる魔力の強大さを、ヒシヒシと感じる。瞬時に、レイアの部屋で垣間見たいかがわしい淫具の数々のことを思い出し、背筋が恐怖に痺れ、腰が否応ない期待でジュンと湿ってしまう。

（期待なんてしてない！　違う、これは……。レイアお姉様が私に、真実を託してくれようとしているんだもの……。私が、信じてあげないと……。！）

欲を芽生えさせ始めた肉体の反応の中から追いやって、もぞりと尻を揺すり股間の湿り気を束の間紛らわせる。そして、強く願った。

「お姉様、私……。信じています」

『天の至宝』と呼ばれたレイアの内に、正義と信条を貫く在りし日の輝きが眠っているのだと信じて。銀髪の乙女は差し出された宝玉に、右手を乗せた。

ぶろうんツ——！！

（信じなきや、私……。みんなを連れて一緒に、帰るんだもの……。）

触れた指先から手のひらに、かすかな振動と衝撃が伝わる。一瞬、弾けるように全身が火照りに包まれて、不意に意識が遠のいていく。

「う……。あ、ああう……。っ!!」

本能が危険に怯え、激しく警鐘を掻き鳴らした、次の瞬間。

白一色に染まっていた視界が覚めると、それまでとは見える光景が微妙に変わっていた。  
(な、に……？ 一体、なにが起こったの？ 景色が、急に……変わった？)

指を動かしてみる。持ち上げた腕を覆うのは見慣れたページュの革手袋ではなく、ぴつたりと二の腕までを包む漆黒の籠手。

「えっ、こ、これ……っ！」

驚いた拍子に右手で持っていた黄金色の宝玉が、音を立てて床へと転げ落ちた。揺れなびく金髪が視界をよぎる。目線を落とせば、黒く輝く鎧に守られた、ふっくら盛り上がる双乳。明らかに、自身のそれに比べ大きく、しっとりとしてイヤらしい艶を放っている。

「んふふ……私の身体、調子はいかがですか、ヒルダお嬢様ア」

真横、左隣からした聞き慣れぬ声に振り向くと、そこには自分自身が座り、おおよそ己のものとは思えぬ淫靡なしぐさで、舌なめずりをして微笑んでいた。

「どう、して……」

また、裏切られたのだと心が告げる。そんなはずないと、片隅でもう一人の自分が反論した。けれど葛藤する乙女の目の前で、その殻であった肉体は卑しく、陶醉しきった声で罨の全容を明らかにした。

「あの玉は『転移の宝玉』。元々は任意の肉体に魂を憑依させるためのものでした。それを私が改良して、今みたいにおたがいの魂を入れ替えるようにしたのです……ん、ふぁ、

ヒルダお嬢様の身体、とっても柔らかかい……」

替えたてのシーツに量感たつぷりの尻を沈ませ、スプリングを軋ませて、翡翠の鎧を纏う乙女が悶えている。下腹をなで、太ももを擦り合わせて響く自分自身の声は、やはり聞き慣れない響きでもって耳朶を震わせた。

（あれが、私……。私の顔、あんなにイヤらしい……。表情して、あ、ああ……。っ）

幼い顔つきに不釣り合いな妖艶に崩れた表情。元々下がり気味の眉はいっそう角度を下げてハの字を形作り、溶けた視線は股下へと注がれればなし。半開きの口からこぼれた舌先が唇を這いずる様が異様にイヤらしい。

それが、自分の顔だとは信じられない、いや、信じたくなどなかった。

「や、やめてっ。やめてくださいっ……。ふくあぁッ！」

もう一度あの玉に触れれば——！

あわててベッド下に転げた宝玉を拾おうとして、床下に転倒する。もつれた脚の付け根に、じんわりを甘い衝撃が拡がったせいだ。

「は、あん……。ヒルダお嬢様つたら、はしたないですよ。やあんっ、ほらあ。お嬢様の身体……。オマンコもうこんなイヤらしく、ぐ・しょ・濡・れ……。あはあ♪」

下着はまだロキの手に渡ったまま、返してもらっていない。だから、剥き出しのその部分から伝わる刺激はよりダイレクトに、感覚を共有するヒルデガードの精神をももどかしい疼きに引きずりこむ。

「アリーヤのおっぱいとお口でされただけじゃ、物足りなかつたんですねえ。くうんッ」  
「う、嘘ですつ。は、ああう、見せないで、見せないでくださいっ……」

目の前でばかりと大腿に開いた自分自身の股間。スカートをめくられて丸見えのそこは濡れそぼち、パクパクと開閉を続ける陰唇がまるで食虫花を思わせる。

「ほおら、奥までもうトロトロお……くう、うああんっ」

長手袋に包まれた自分の手が、見せつけるみたいに濡れた陰唇を左右に引つ張り、突き出した腰の奥の奥。産道へと続く薄桃色の粘膜までを露わにする。晒すほどに昂揚し、息弾ませた少女の顔が淫魔の類のようにすら見えてきて、やもたてもたまらずに目を背ける。  
「くひイっ!? ど、どうしてえっ……!」

反面、開発され尽くした金髪の乙女の肉体は伝わる快楽を享受し、股下からは早くも滴るほど多量の蜜汁が噴き漏れていた。

「ん、ふふふっ……それはあ、お嬢様が淫乱……だからですう」

「ち、が……ああっ、違いますつ……これは、これっ、やああああっ!」

間断なく響いてくる快楽衝動に侵され、ベッドの下に潜ったらしい宝玉を探ることも、床下から立ち上がることもすままならぬ。芋虫のように転がって這いずり、そのわずかな刺激にすら肌が疼いて、乳首を硬く尖らせる。

「そうそう、言い忘れてましたけど、その黒い鎧は絶えず身体を刺激し続けてるんです。とおつても気持ちよくて、素敵でしょう……やあんっ、こっちにも伝わってきたああ」

「ひぐつ！ んあッあああ!! そ、んな、やつ、やあ……胸ええつんにやあああつ！」

タイミングを図ったかのように、隆起した乳首を黒い胸当ての微細な振動が襲う。乳腺を震わせながら突き抜け、あつという間に心臓まで達した肉悦楽は、切ない鼓動となって全身へと蔓延していく。こぼれた蜜汁を吸うように、黒の極小ショーツが食いこんだ。割れ目をぎゅうぎゅう絞られて、またよけいに快楽の蜜液があふれ出す。

頭の中では何度も白熱が弾け、純真なる乙女の精神を取りこもうと躍起になって肉の悦びを叩きつけてくる。

(だめっこれだめえええッ！)

このままでは、ダメにされてしまう。肉の欲望に侵され、病みつきにされて、目の前の墮落乙女のように、悦びを得るためにはかつての仲間を騙りを働くようになってしまう。激しく危機を抱かせるだけの峻烈しゅんれつさで股肉に響き、媚肉を貫いて衝撃は愉悦へと昇華する。

「――準備できたようだな」

新たに響いたその声は、今、もつとも聞きたくない声のうちのひとつだった。青い髪の中半半魔ではない。黒髪の魔将デューク。レイア同様扉をすり抜け現れた彼が、床上の金髪には目もくれず、まっすぐに翡翠の鎧を纏った身体のほうへ、歩み寄っていく。

「デユ、デユークさんっ……やめ、んうあああああつ！」

止めなければ、またレイアの部屋で見た光景が再現されてしまう。しかも、今度餌食になるのは自らの――翡翠の乙女の穢れなき処女肉なのだ。

だが、焦るほどに身に伝わる振動は鮮烈に、這うほどに股布が股間に食いこんで、行動を阻害した。蜜汁と悦楽を搾り取られ——なのに今一步のところでショーツは締めつけを緩め、無性にもどかしさばかり増長する。

「はく、ううう……!! ま、また止まつ、てえ……ううんつ、ん、んふうあああつ」

歯がゆさを堪えて力なくベッドを見上げることしかできない。囚われて以来幾度目かの無力感、掻きむしりたくなるほどの肉の飢えに塗り潰され、次第にかすれていった。

「やあん、ご主人様……早くココに、レイアの……ううん。ヒルダの処女マンコにおちんぼ下さあい……」

「なっ……!! や、ああくううう!!」

口を挟もうとして、強く胸当てに乳首を押し潰される。つぐんだ唇は一時の間をおいて、抗議の代わりにふやけた嬌声をほとばしらせた。

(何を言っているの、お姉様。それは、その身体は私の……私の身体、なのにつ……!!) かるうじて抗議の視線を投げかけた、自身の紅い瞳を受け止めて、レイアは少女の声で陶然とささやく。

「わかり合おう、つて言つたじゃないですか。んふ、きつとヒルダ様もおちんぼの味を知ればわかるはずですよ。でもでも……初めては痛いから、代わりに……ね? ねっねえっ? は、早く……ずつぷり来てくださあいっ、ご主人様アア……」

「——そういうことだ」

自分の姿をした女が翡翠の鎧を鳴らして、尻を振る。魔将がベッドに上がり、二人分の重みでギシギシと鳴いたベッドが、まるで歓喜に悶えているようにすら聞こえて。

「や……！ やめてええっ！」

生涯ただ一度きりの、女性にとつてもっとも大切な行為。そのすべてを他者の手に委ね、自分はただ見つめることしか許されない。残酷すぎる仕打ちに紅い瞳から涙をこぼし——相反して欲情しきつた墮落乙女の淫唇が、すでに知っているその瞬間の痛みに期待して蜜を漏らした。

「はい……♪ こ、れ。あげますね……えいつ」

「え……きやあああううう！」

なんとか立ち上がろうともがく両手を、何かに巻き取られ、あごから転げてまた地べたに這わされる。強く床に打ちつけたあごの鈍痛に顔をしかめ縮こまった隙に、へその前で両手首が縛られた。蛇に食いつかれた、鋭くきつい締めつけにとっさにそう錯覚する。

「彼女、ヒルダお嬢様を可愛がるためだって言ったら、喜んで貸してくれたんですよお」

「か、彼女……？ あ、ああ……っ、う、く、ロキ、さん……」

急ぎ見つけた手首を縛っていたのは、ロキ愛用の鞭で。この場にはない青い髪の半神の名をつぶやく。ただそれだけで胸ときめかされ、その所業に深く痛めつけられた。

「それじゃあ……お嬢様によく見えるように……私が上に乗ります、ね？ んっ……しよ、あああん、硬あいわあ……♪」



間髪入れずに寝転ぶ魔将の上に、背中を向け跨がったレイアが、処女の股肉で肉棒への奉仕を開始する。ズボンのジッパーを下げて内に潜りもぞついた長手袋が、赤黒く腫れた肉の凶器を握って戻ってきた。愛しくなでたその幹がへそに突かんばかりに反り返ると、翡翠の瞳を細めて尻を乗せ、谷間でゴシゴシ擦り始める。

「やめてくださいいっ、お汁が染みて、におい取れなくっ……やふわああああ！」

囚われてから何度「やめて」と懇願したのだろう。デュークの肉棒の脈動、熱気、強張り具合まで手のひらに刻まれる。まるでじかに握っているかのようにリアルに感じられる牡肉の鼓動に、処女と墮落乙女のふたつの子宮が同時にキュンとうめいた。

（わ、たしのアソコにデュークさんのグニグニっ、ふぁ！ し、痺れるうう！）

ロキのものよりも肉厚で、その分恐怖を煽る代物だった。まだ男を知らぬ股下の小さな唇。いくら蕩けてしまっても、縦スジにしか見えぬそこに入るはずないと、慄いてしまふ。

「くうああああんっ。ご主人様のおちんぼイイいっ、処女の子宮が啼いてるのおおっ」

「言わなっひぐううっ！ い、言わないっ、でえっ、あひ、響くふううう！」

共有した感覚は二乗されて、おたがいの股根に深く、根を張り巡らせる。

「ほら、ほお、らっ……んっ！ んん！ ヒルダお嬢様のオマンコとお、ご主人様の先っぼお……ちゅっ♪ やはああっ！ これきくううん！」

後ろ手に探った右手で持ち上げられた肉の傘部分と、処女の股肉とが接着した。生殖器

同士でキスするように、何度も密着しては離れ、また、くつついて押し潰れ合う。数時間前に見たレイアのそれと比べ相当幼い己の股肉が、今まさに割り裂かれようとしている。

「やはあつ、ビクビクしてっ！ やっ……んくッふアアア！」

本能が訴えかける恐怖に晒された唇が再度「やめて」と懇願するよりも早く。牡肉に直接触れた処女の肉ビラが歓喜に震えているのが伝わってきて、瞬く間に乙女の意識は肉の疼きに吞まれてしまう。視覚で捉えた恐怖を肉体で覚えた愉悦によつて塗り潰してゆく。呼応して墮落乙女の肉体の下半身全体も、小刻みな痙攣を始め――。倍増された快樂は、まるで金槌で叩きつけられたかのような苛烈ぶりで、子宮を揺さぶる。

――びゅるっ！ ふたつの膣口がほぼ同時に、ドロリと濃厚な蜜液を噴き漏らした。

（私の身体が、男の人の……で悦んで、る……？ そ、んな、あッああふ……うう！）

いくらレイアの魂に乗っ取られていても、肉体は処女のはずだ。信じられない、信じたくなど、ない。どうにか縛めを解いて身体を取り戻そうと両手に力をこめてみる。けれど抵抗すればするほどに、意思持つロキの鞭は手首に食いこんで拘束を強めていった。

「あはア……もうグッチョグッチョお。や、ああんっ！ ダメえ……もう我慢できなあい入れてえ……とつくに準備万全のドロドロ処女マンコにい、ずぶつときてくたさあいイ！」

レイアのものよりもずつと狭く、縦スジにしか見えない割れ目の上を、触れ合う極太の男根が行き来する。ヌラヌラたがいに濡れた肉を前後に擦り合う、そのたびに泡立ち飛び散る蜜汁と先走りが、照明に透けてきらめいて見えた。



(民どもが、私を見て昂奮して……る、ううんツ！ ふくあつま、またいぐうう！)

びくんつ！ ぷつ……しゃああああ……！！

「あああ、アリーヤつたらはしたなあい。私だつて、負けないんだからあ、んつ！ んつ  
ふわああああああんつ！」

ぢよぼつ、ぢよろろろろろろつ、びちやつびぢやびぢやびぢやああああつ！

二人一斉に漏らした尿液で、扶まれた槍は見る間に濡れ——二度と黄ばみが取れなくなつてしまふ、そんな妄想を浮かべて、また黒髪の乙女は絶頂の只中へと身を投げた。

「何度でも満たしてやる。レイア、アリーヤ……：貴様たちが飽くまで何度でも、なツ！」  
びゅぶるつ！ ぶびゅうううつ、びぐつ！ びるりゆりゆりゆるるるうつ！

果てることないマーキング行為に、心の隅々にまで魔将のにおいと味を刻みこまれ、い  
つしかアリーヤはレイア同様のガニ股で、無意識に従属のチンチンポースを取る。

しがみつく槍の冷たさが乳首を刺激し、腿肉にぶつかると、そしてレイアの尿のぬく  
もりに煽られるみたいに絶頂の大波は高まり、長く、長く持続して。痙攣する妊婦腹を伝  
う濁液が妊娠線を通つてへそに溜まりこむ、その感触で一気に爆ぜ散つた。

「くふあつ、あはわああつ！ まらあつ、いつてひまふうう……：マンコいぐううツツ！！」

恍惚で満ちた子宮は逃すまいと膈内に溜まる子種汁を吸い上げていつそう熱氣を孕み、  
弛緩した膀胱から黄ばんだ排泄液を漏らし続ける。

「んつ、ふううんつ。民の蔑みの視線チクチクう……：いつちやいます、うううつ！」

心地よい疲労からくる眠りに落ちこみかける残月の乙女の脳裏に、繰り返し墮落乙女の嬌声は響き続けていた。

残月と蒼穹の、二人の戦乙女の痴態が繰り広げられる、その裏で。ちようど黒髪の乙女と背中合わせの反対側に位置する高台の南端で、青髪の半神と、彼女の虜囚たる銀髪の乙女は戯れていた。

「ほら……もつと。もつと乱れた姿を見せつけてやりなよ」

「は、はい、こう……ですか？ あつああんつ！ ギチギチイツ、き、きついですうう！」  
相も変わらぬ肉景色。甘酸っぱく立ちこめる恋人の体臭を吸い、ひっきりなしに、正常位に組み敷かれた大地の戦乙女ヒルデガードの喘ぎ声が轟く。時折ずり落ちそうになるほど高台の端で飛び跳ね、銀の長髪なびかせる彼女の首には、ロキからの贈り物。『誓いの首輪』が装着されていた、

彼女の髪色と同じ青の宝玉がはめこまれた首輪は、終生の従属の証。『琥珀の指輪』、そして『オーディンの瞳』。ロキの手に落ちたふたつの宝具の代わりにと与えられた、新たな枷でもある。

（これを着けている限り、私はロキさんのモノ……）

溺れている実感はある。あるが、もう引き返せなどしない。逃れようとも思わなかった。「たくさん民たちに奉仕して……。その分だけボクがヒルダを可愛がつてあげる」

甘いささやきを耳朶へのキスと一緒届けられ、歡喜に震える乙女の秘芯が正常位で深々と刺し貫かれる。民たちの溜まった欲望を発散させて使命感を満たし、同時に甘い香りに包まれて愛しさに酔う。銀髪の乙女は幸せに全身を浸けこみ、甘く啼く。

「んくふううっ……ンン！ ロキさんのおち、ちんっ、奥まで！ ふうあ、ああつ、奥までずっぽりいいっ！ きつ、きてますうう！ 子宮っ、キウンキウンうずいてええ！」

長大な男根で膣内を満たされるのは、女として至福のひと時だと、ロキは教えてくれた肉棒によって与えられる圧迫。受け止める子宮の胎動の心地よさと切なさで、今では少しの疑いもなく彼女の言葉を信じ、肉の悦びに溺れることができるまでになった。

身を覆う戦乙女の鎧もなく、下着もずつと着けていない。ただ、着乱れたドレス一枚身に纏い、少女は愛しい女にすがりつく。

「ふふ……ほら、お口が止まってるよ？ 待ちわびた民たちが、もう我慢できないって顔してるじゃないか」

「あ……は、あ、いつ……ご奉仕、いたひまふ……」

繰り返し突き上げられ、半ば以上壇からずり落ちて逆さ向いた乙女の頭のその先で、長蛇の列を成して立ち並ぶ男たち。先日の教会でのことを噂に聞きつけ集まってくれた、癒やしを求める男たち。

（みんな、股間を腫らして……彼らの欲望を解放して、あげないと、あ、ああ……！）

そうすることが今日この日、わざわざ集まってくれた彼らのためなのだ、蕩けた脳裏

に言い聞かせる。愛しいロキの愛撫が欲しくてたまらない肉体は、すんなりといびつな論理を受け入れて、小刻みに震えながら蜜を吐く。肉欲に喘ぐ乙女は周囲の目の存在を再認識することで、ますます膣肉をうねらせ恋人のモノを締め上げた。

「お腹の具合はどうだい？ ちんぽ以外の感触を感じる？」

「つふ、ふぁ、いいっ……ロキさんのおちんぽとっ、ロキさんのむ、鞭がぐりぐりゆ、中で、こ、擦れてっ、ひ、響いてますふううう！」

収縮する膣内で感じる圧迫、そこに付随する甘美な刺激はいつもに倍するほど強く、乙女の心と股間を貫いて、いつそう根深い陶醉へと引きずりこもうとする。今日は、ロキの肉棒一本でもみっちり埋まる狭い膣内にもう一本。半神半魔愛用の意思持つ鞭が柄のあたりまで突き入って、圧迫を強めているのだ。

「ぐ、うおっ！ 戦乙女様あぁっ！ し、失礼しますっうっおおお！」

びゅぶりゅっ！ どぶううううう！

「んぶぁ！ んぐっ……ごきゅっ、ごくんっ！ がぼぼっ……えは、あぁあぁ……っ。遠慮しないれ……らひて、いつてくらさぁいいっ！」

列成した男たちは皆一様に己の手で勃起した男根を扱き上げ、順が回つてくると、大地の乙女のぽっかり開きっぱなしの口腔めがけ白濁を放つ。男たちの至福の表情を見つめながら、ヒルデガードはピチャピチャ跳ねる子種汁を喉鳴らし飲み干していった。

「うはあっ、そ、そんなに握られたら！」「で、出ちまう！ うあっあぁあ！」

女神の墮落を目の当たりにし、悲嘆に暮れつつも肉欲に溺れた、民たちの咆哮が轟く。

びるぶつ！　びゅつびゅぐぐつ！　どびゅぶりゅううううううううううう！

壇上から転げぬよう、すがりつき握った両手の内で、民たちの肉棒から白濁が弾ける。次々全身に浴びせられる濁液は、まるで祝福の雨のようにすら感じられ、喉元にまで注がれた粘り気が、理性の残りカスを綺麗さっぱり押し流していった。

（民たちの欲望が、口と、身体に染みて……ふ、あつ、し、幸せへええ……！）

まるで小便器のような扱いを女神に与え、男たちが嗜虐に駆られている。欲望のたぎりを吐き出し尽くし息をつく。そんな彼らのだらしなく緩んだ表情を見、ヒルデガードもまた奉仕の悦びに溺れていく。

ロキは愉しくて仕方ないという表情で乙女を見つめながら、ひっきりなしに引き攣れる腔内で肉棒を膨らませていった。

「感じるよ、ヒルダの悦びを。肉ビラ一枚一枚が甘えるようにちんぽにすがりついてる」

「ぶあ……！　あは、あつ……は、はひいつ！　ロキさんのお、おちんぽいにイ！」

子宮口の付近でとぐろを巻いていた鞭がぐるぐると腔肉を掻き混ぜて内部で蜜を泡立たせる。つるりとした鞭の表面で執拗に扱かれた腔壁が怯えながらも恭順して、与えられる苛烈な痺れを甘受していた。

腔洞全体が収縮したおかげで、よりびつたりとロキの肉棒に張りつき、彼女の鼓動、ぬくもり、昂奮から息遣いに至るまですべてを鮮明に知ることができる。そのことが何より





嬉しい。愛されているのだと実感できるこのひと時が永遠に続けばいいのに。そう、大地の乙女は心の底から願ってしまった。

「ちんぽが高鳴ってるの、わかるよね……？」

「あふつ、つくふううう！ は、はあつ、いいつ！ 中でつ、私の中でビクンビクンつてへえええ！ カチカチおちんちんつ高鳴つへまふううう！」

腔内でしなる鞭は隣接するふたなりペニスにまで振動を伝え、よけいに硬く反り返らせ、腔粘膜をより強烈に挟らせる手助けまでしてくれる。鋭く尖った肉傘で押され、すり潰される肉壁からは止め処なく蜜と甘美な衝動ばかりだだ漏れて、少女の胸は多幸感で一杯に膨れてしまう。

「つ、次は俺のもつ！ くつ……戦乙女様の口マンコにつ、で、出るう！」

びよるつ！ ぢよぼつぢよぼぢよぼぢよぼぼぼぼッ！

「ごぶ……つ、けほつげぶ……ッ！ んつごきゅつごきゅ、んぐぐつ……もつろ、もつろらひて、いいんれふ……よほ？ んつんぢゅりゅううううつ！」

今また口腔めがけて弧を描き飛びかかってきた濁汁を、わざとはしたなく音立てて飲み干せば、ロキも、民たちも悦んでくれる。他人の至福に悦びを見出し、大地の乙女自身もまた、キュンと切なく響く子宮の疼きに身を任せることができた。

皆が幸せになれる。気持ちいい。愛しいロキの胸に抱かれ、甘いにおいも好きだけ見える。何ひとつ不幸なことなどないと、蕩けた脳裏、依存しきつた心根で曲解し。

（ロキさんが悦んでるううッ！ あ、あはあああッ！ 嬉しッ……んほッおおうう！）  
尽くす悦びに心弾ませ、愛される嬉しさで乳首を尖らせる。そんな少女の気持ちを弄ぶかのように、胎内でとぐろを巻いた鞭が子宮口に絡みつき、ギチギチと引き絞り始めた。  
「あ、はああ……っ、縮まる、う……！ ふ、ふふ……太さ細さも自在に変えられるからね。細くなつた鞭で子宮の入り口を絞られるなんて……滅多にできない経験だよ？」

みちっ、みちみちゅっ……！

「はああつくふううっ！ 苦しっ、で、すっ、つかはあッ！ はひっ、ひっ、ひぐう！」  
ただでさえロキの肉棒と鞭を咥えこみ満杯の膣穴が、緊張と驚きでさらに引き攣れ、収縮する。ロキの肉棒が小さな鼓動を響かせる、それだけで膣を内側から拡げられているが、ごとき苛烈な圧迫感がヒルデガードの股間を襲い、また被虐の悦びに囚われていた。

「なんつうエロい顔だあ……」「くっ、順番待ちしてる間に出ちまいそおだア！」

（あ、ああ、見る……はしたない私を見て、民たちがまた欲望を溜めこんで……！）

視線の先。まだ数百と立ち並ぶ男たちの、卑しい視線が胸を突く。彼らの欲望を鎮めるたびに、ロキに愛の言葉と快感とを与えてもらえる。半神半魔の柔らかな胸に居所を見出した今、安住の地を追われぬため、彼女の求めに応じることが何よりも大事なこととなった。その上で、見られる悦び、突かれる悦び、貶められる悦びに埋没する。

「がぼっ……げぼっげぼっ！ んちゅうっ……れる、んぐっ！ んっ、んぐううっ！」

逆さ状態で血の上る脳裏に幾度も白熱がフラッシュバックし、その都度目の前で弧を描

く白濁を汁濡れた鎧と肌で、唇でそして突き出した舌で受け止め、喉を鳴らす。

もうとつくにタプタプの下腹部がキリキリと痛む。でも、直後のロキの悦びの音が痛みなど消して余りある至福を乙女の子宮へと届けてくれた。

「いいよ……ほらほらほらあつ！ どうだい？ 限界一杯の膣の奥の奥でっ！ ちゃんぽに子宮口までこじ開けられそうになつて……これでもまだ感じられるっていうのか!？」

まだ足りぬとばかりに、細く変化した鞭でがんじ絡めに囚われた子宮口を、ゴリゴリと肉傘が擦り、ねじ入ろうとする。

「あああああつおとおおつ！ おぐつ！ ううつ！ うッ……!!」

元来狭い肉穴にふたつも異物を咥えこみ、さらに蹂躪されるのはとてつもなく苦しかった。胎の内から破裂するかのような感覚に、精液臭いげつぶが吐き漏れ、醜い音色の鳴咽が続く。けれど開発されきつた肉体は痛みを感じない。

（ロキさんが悦んでくれるならつ、全部終わればまた、甘くて柔らかい胸で抱き締めてもらえるつ……し、幸せなおおおつ!）

愛情を試されているのだと思えば、息苦しさなどはすぐに掻き消えてしまった。

代わりに、膣肉を削られる時の腰骨が蕩けそうなくらいの快感、目一杯子宮口を押された時の頭の芯まで届く幸せな気持ち——愛しさがあふれて乙女の子宮内に蔓延する。

「くふううっんんん！ いくつ……イキますううつ！ ロキさんっロキさあつ、あああああ！ んむううつ……んちゅつ、ちゅつ、ちううううう！」

甘美の限りに、子宮の疼きを伝えるみたいに喉震わせ叫んだ唇を、ロキの唇に塞がれた。覆いかぶさってきたロキの上半身。昂り尖る少女の乳首の真上に寸分違わずロキの豊乳が被さり、たがいの纏う衣服など最初からなかつたみたいに鼓動を、ぬくもりを、のしかかつて潰れる乳肉の柔らかさを鮮烈に伝えてくれる。

(嬉しいっ、嬉しい嬉しいっ！)

いつときも離れていたくなくて、ぴったりと股間を押しつけ、重なり合って、グチグチとうねる粘膜の心地よさを甘受した。

「鞭で子宮をがんじ絡めにされて……縛られるのがそんなに好きかい？ 欲張り……お嬢ちゃんッ！」

——ずぶううっ！

「くひいああああ——ツツ!!」

深く、蕩けた肉壺を肉傘でほじられ、脳天から背筋、腰の芯までドロドロに、魔性の肉欲が駆け巡る。悦びにふやけた子宮口が素直に開いて、腔ヒダが肉棒を招き入れようとうねりまくった。

「おおお、戦乙女様の口につ……んぐっ、おッおおおっ！」

もう、離れられない。離れたく——ない。また前触れなく視線上を横切った白濁汁を舌で受け止め喉に流しこみながら、大地の乙女はどうとう束縛されることを自らの意思で選び取る。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)



全国書店で  
**好評発売中**

**男の子と女の子——**  
二つの性の間で揺れ動く  
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

オトミコ! 僕は男の巫女娘

【小説：大熊狸喜 / 挿絵：大空樹】



**目覚めると  
従姉妹を護る  
美少女剣士  
になっていた**

【小説：狩野景 / 挿絵：天鬼とらり】

全国書店で  
**好評発売中**

**平凡な少年が女体化!  
鬼に狙われた従姉妹を護れ!!**



全国書店で  
**好評発売中**

**凄腕退魔士の咲妃を  
牝奴隷に堕とす  
新たな敵の登場!**

呪詛喰らい師2

【小説：蒼井村正 / 挿絵：或十せねか】



**既刊LINEUP**  
● 仙界学園姫姫 / プナガッ! ①～③  
● ビルグリムメイデン ①～④  
● 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

● 思春期なアダム ①～④  
● 呪詛喰らい師【コースイーター】  
● 女幹部メル様のセカイ征服計画!  
● 借金お嬢 크리스 ①～③  
● 無敵の短剣士がトミコに目覚めたようです  
● 宇宙海賊学園 ブラックキャット



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!